

# 赤司さんに献盃 !!

藤田 富雄

## プロローグ

学者、牧者、教育者としての赤司さんの遺徳を偲ぶ人々の敬愛と哀悼の切々たる真情のこもった声が、葬送式、埋葬式、遺稿集出版記念追悼会などで、列席者の胸を打った。月本さんの弔辞も脇本さんの講話もすでに活字になっているので、私は赤司さんとのつきあいのエピソードを並べて、きわめて私的な「人間赤司道雄の素顔」を書くことにする。

## 最初の出会い

昭和24年3月11日に、岸本、大島、小口の諸先生を囲んで、助手や特別研究生の戸田、赤司、野田、野村の諸先輩が旗本のように立ち並んでいる前で、われわれの学年の卒業口述試験が行われた。「ヘーゲル哲学の宗教的基礎」という卒論の大意を私が説明した途端に、ディルタイ理解をめぐる質問を浴びせかけたのが赤司さんであった。細かな論点は忘れてしまったが、私は赤司さんのディルタイ解釈に同意できないと強い口調で反論した。赤司さんは何と生意気な奴だという苦々し気な呆れ顔で質問を打切った。私は自信満々で高飛車な言い方をする先輩の顔を驚いて見つめた。これが赤司さんとの最初の出会である。二人ともまことに若かったのである。

## 酒から始まったつきあい

シカゴ大学留学中の赤司さんから、平井直房さんに古本を送ってもらい、その代金を平井夫人に支払うようにとの連絡が研究室にあった。戦後アメリカの哲学状況など全く知らない私は、シカゴの学生が読んでいる本を購入したいと手紙を出し、ホワイトヘッドやハートショーンの諸著を入手した。赤司さんの友情に溢れた平井さんへの配慮に心を動かされ、すこし赤司さんを見直す気になった。帰国して立教大学の専任講師となった赤司さんと再会したのは28年であった。宗教学の講師と

して立教大学に出講していた脇本さんと三人で、池袋のビヤホールで乾盃し、シカゴの話を拝聴した。これが長い酒友としてのつきあいの始まりとは夢にも思わなかった。これこそが、立教大学でのちに一時期を風靡した? 「赤司・脇本・藤田のトリオ」の誕生であった。

## 酒道会のプロモーター

立教大学の一般教育部には酒を愛する人が揃っていた。佐々木喜市御大を頭に戴き酒道会が結成され、まだ兼任講師の私もメンバーに加えてもらった。年に2、3回、学部学科教員職員の枠を超えた酒好きが集った。「去る者は追わず、来る者は拒まず」、「酒徒は量多きをもって貴しとなさず、風格あるをもってよしとす」と教えられ、私のような呑兵衛は兵隊の位でいえば下士官だと叱られた。最初の銚子一本を各自が正座して恭々しく味わう儀式で始まったこの会は、二本目からはすぐに無礼講となった。ただし政治の話は厳禁、興至ればシャンソン、流行歌、小唄、民謡、浪曲、踊りと次々に自慢のお座敷芸が披露され、二次会、三次会では三業地に席を移すこともあった。酒と遊ぶことを楽しむ会員が70名を超える時もあり、学部長や総長まで参加したこともあった。リーダー格で座持の名人赤司さんが、酒道会のプロモーターとして果たした役割は大きい。

現在ではすっかり有名店になった笹周が、酒道会の巣であった。一階を占領して鴨鍋をつつきながら、飲み語る常連の一人に赤司さんがいたのはいうまでもない。初めて「獅子頭（実は猪の頭）を食う会」を企画した時には、流石の赤司さんも「猪の眼をこちらに向けなくてくれ」と叫んで、気味悪そうに恐る恐る肉を食べていた姿が忘れられない。紳士然としたクリスチャンではあるがヒマラヤ帰りの猛者連中や、脳味噌がうまい、タンは絶品と骨までかじる如何物食い連中を横目に見

ていた赤司さんも、2回目からは一転してその美味さに舌鼓を打って、「おい、またあれをやろう」と積極的に提案するようになった。しかし、料理の手間と時間がかかり過ぎるというおやじの話を了解し、名物のこの料理は間もなく姿を消した。和菓子屋を飲屋に転業させた仕掛人の私には、懐かしいアイデア料理であった。囲炉裏でおやじと盃を重ねながら、あの当時まだ小学生であった若旦那の薦める銘酒を、もう一度赤司さんに飲ませたいと話している今日此頃である。

### 国際宗教学会とTMC

戸田、赤司、脇本の三羽鳥が「自分達が防波堤となり犠牲を最小限に食い止めるから、君達はいざという時は全面的に助けてくれ」といって悲壮な決意で岸本運営委員長のスタッフを引受けたのは32年であった。松本滋さんを加えた「七人の侍の会」の活躍で準備は着々進められ、33年4月からはわれわれ若手が侍大将の傘下に加わり、8月には研究室の全学生が総動員された。連日の準備の最中に、独文レジメの翻訳が赤司さんと私の仕事に加わり、二人とも帰宅後に酒を飲む暇もないとこぼした。やっと学会を終えて京都の旅館に赤司さんと同宿した。突然電話で呼び出され、初めて祇園の料亭で、大先生方のご相伴に預かったのも二人であった。帰京の途中伊東温泉で下車した柳川さんと私は、翌日の午後まで眠りつづけたほど、精も根も尽き果てていた。しかし、ともかく国際学会は大成功であった。

ひたすら仕事に追われて何も勉強できなかったことを反省して、国際学会の直後に赤司さんから藤田の学年までだけを会員に限定する「TMC(つむじまがりクラス)」という研究会を発足させた。提案したのも命名したのも赤司さんである。この会は時には口惜し泣きをする仲間が出るほどの厳しい批判の飛び交う恐ろしい切磋琢磨の会であった。しかし、研究会の後の飲み会は楽しかった。TMCは今に至るまで、われわれの心のより所である準抛集団となった。野田、柳川、赤司と仲間は欠けてきたが、生き残った者は何でも話しあう仲でありながら、各自の旋毛曲りは変っていない。赤司さんの悪口の歯切れのよさを懐かしんでいるのは私だけではない。

### ウィ・アー・トゥイン

若い頃の赤司さんと私は体型だけでなく、類似点が多かったようで、よく間違えられた。立教大学のキャンパスで「今度は間違っていないと思いますが、赤司先生」と呼ばれたことは屢々で、見知らぬ学生に「藤田先生、何とか合格点を下さい」といわれて赤司さんが目を白黒させたという笑い話の数は知れない。外国人に対しては、二人で相談して双子だということにした。どちらが兄かと問われると、二人とも「オフコース・ヒー・イズ」と言いあって、相手が困惑するのを楽しむ茶目気も旺盛であった。石津大先輩が私を赤司さんと思いこんで話しかけられたこともある。話している中に私は間違いに気がついたが、今更人違いですとも言いかねて、澄ましてそのまま別れた。後でそれがバレて、「君は人が悪い」と恨まれ、恐縮してあやまった失敗もある。

一高では文乙、東大では宗教学科、立大では一般教育部の哲倫研究室というように、赤司さんの跡を追った後輩の私であるため、特別に専門のことや私的なことでない限り、どんな話題にも自然に話が合うことが多かった。おまけに太り気味、丸顔、眼鏡の型まで同じであったので、赤司さんが国学院大講師になった時には、岳父西角井正慶まで「婿殿と間違えたら困るなあ」と心配したほどであった。しかし、赤司さんは自信あり気に尤もらしい顔で私に断言した。「藤田、君と僕とを見間違えるのは女の子だよ。女は決して間違えることはないからね。」

### 持ちつ持たれつ

母の葬儀委員長をしていただいた時のことである。冠婚葬祭はお任せ下さいという教え子三人から、意見調整を喪主に相談できない場合に即決できるシャッポが欲しいという申し出があった。迷うことなく赤司さんにお願いした。快諾してくれた牧師先生は、仏式の葬儀には不案内なので、相談に答えられないことが続出したが、「こうしたらいかがでしょうか」「結構です」「こうしてもよろしいでしょうか」「どうぞ」という調子で事は運んだらしい。すべてが終って、初めての不馴れな大役ご苦労様とお礼を述べる私に対しての一言。「いや、驚いたよ。キリスト教式と仏式がこんな

に違うとは知らなかった。よく分らないので、彼等のいう通りにしたよ。それにしても心配りの行き届いたよい教え子達だね。」赤司さんはやはり大物であった。

私の懐の豊かでないことを察して、手のかかる子供の家庭教師、教会の集会室を利用した受験指導などのアルバイトを世話してくれたのも赤司さんである。お蔭で赤司家の方々と接触の機会も増え、さまざまな問題について忌憚なく話しあうことも多かった。

「紛争ではなく闘争です」と赤司道和君は主張するが、大学紛争当時の赤司一般教育部長の心労は大変であった。役職のない無冠の太夫であったため自由に行動できた私は、赤司テクロ製薬会社の専務藤田と攻撃されても、平気で飛び廻った。

それから20年以上もたった。赤司さんが注射を拒否していると聞き、「まだ我儘をいつているのか、素直になれ」と説教しようと慈恵医大に出かけて行った。やっと前日から注射を再開したとのことで、「文句を言うつもりできたんだが、よかった」というと「わかっているよ」と微笑した。着

替えの時、「こんなになってしまった」と痛々しい無残な裸体を見せながら、ナースさんに向かって「こいつの頭がこんな白髪になったのは俺のためなんだ」と赤司さんは呟くように告げた。これが赤司さんの私への別れの言葉であった。

#### エピローグ

「馬鹿野郎」といつてくれる赤司がいなくなったというのが、脇本さんの哀惜寂寥の情の溢れ出した歎きである。「赤司が死んだとはまだ信じられない」と中野幡能さんは書いてきた。「研究者として、牧者として愛の生涯を最後まで生き抜いた宗教者」と安斉さんは書いている。「死後の赤司さんの前でも、僕は頭を上げられない」と井門さんは告白する。

エピソードしか語れない私は、一時退院中に机の抽出と本の後にかくしていた酒をとり出して、にこっと笑いながら「おい、一杯やろう」とこっそり乾盃したのが、一緒に酒を飲んだ最後になったことを思い出している。「今度こそ、おおっぴらに、心ゆくまで、皆と一緒に飲みましょう。赤司さんに献盃!!」